成形粗飼料利用による肉用牛集団哺育技術（第1報）

菊地 慎・亀由 昭・浦上次男
（長崎県畜産試験場）

肉用牛子牛の集団哺育は概して発育のバラツキが大きく、市場性の低い牛も見受けられる。最近の親子分離哺育法は採食量増加による発育改善効果は明らかであるが採食競合の問題は依然として残る。これを打開するため給与飼料を基本的に考え直し、子牛でも栄養バランスの取れた飼料を充分に採食できるような飼料面からの工夫として、成形粗飼料を試作し、哺育飼料としての予備試験を実施した。

1. 試験方法
1）試験期間
昭和53年9月5日から11月29日（85日間）

2）試験牛
母牛は4才〜8才、産仔6頭近で1カ月間に生まれた雛子牛3頭、雛子牛1頭、計7頭（親子7組）を供試した。

3）哺育別飼料

<table>
<thead>
<tr>
<th>飼料名</th>
<th>内 容</th>
<th>D.M</th>
<th>D.C.P</th>
<th>T.D.N</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>粗飼料</td>
<td>稲ワラ40%、ミカンジュース粕乾燥粉40%、アルコール蒸溜廃液20%、混合8mm粒ベレット</td>
<td>54.0</td>
<td>2.1</td>
<td>54.8</td>
</tr>
<tr>
<td>濃厚飼料</td>
<td>幼牛用8mm粒ベレット</td>
<td>87.0</td>
<td>14.0</td>
<td>70.0</td>
</tr>
</tbody>
</table>

4）管理
屋外飼育で、生後3ヶ月頃より親子を分離し、子牛は3アールの運動場よりなる別殻飼育に追込み、柵越えに哺乳させた。

2. 試験結果
各期別の1日当たり採食量は第2図の通りである。飼育試験を混合して1日2回分与した。柵越哺乳法で哺乳回数を制限した関係もあり、成形粗飼料の採食性は良好、飼料全体の採食量は大となった。各個体の発育成績は第1図の通りで、親子分離、成形粗飼料給与期に入れてからの増加は途上昇した。体各部位の発育は極めて良好で栄養度指数は6ヶ月平均1.8であった。

まとめ
子牛の成形粗飼料に対する嗜好、採食は良好で、増体についても85日間の雄平均D.G1.00kg。聴平均0.98kg、平均0.99kgと優れた成績を示し、性別、日令別の増体差は見られなかった。なお、柵越哺乳は容易で数日後には習熟した。